



教室で毎日生まれる【時間差】

コスモスハーモニーへのお便り、いつもありがとうございます。

紙面の都合上、全てを紹介しきれないわけではありませんが、できるだけお家の方々の声は積極的に紹介させていただきたいと思っています。

また一通、素敵なお便りをいただきました。紹介します。

今日は授業見学に行ったので、簡単な感想を投稿させていただきます。

算数の授業では、3つの数のたし算&ひき算をやっていました。

ネズミがバスから降りる問題では、ネズミと同じ数だけ生徒が選ばれて前に出て、実際に数を増やしたり減らしたり実演していました。

子どもたちがみんなネズミに選ばれたがったり、前に出た子たちがネズミのマネをしていたりと、子どもらしくて微笑ましかったです。

計算となると、早く解ける子とまだ時間のかかる子との差がありましたが。

計算が苦手な子にはカウント用のそろばんをかしたり、得意な子には追加でスペシャル問題を出したりと、それぞれに配慮があるのがいいなと思いました。

音楽の授業では、「君が代」「ソラン校歌」から様々な英語の童謡まで、幅広いジャンルの曲を次々と歌っていたので驚きました。

美怜先生が英語(ときどき日本語)を使って、身振り手振りをまじえ、ときには歌いながら、豊かな表現力で楽しそうに子どもたちに教える姿が印

象的でした。

選曲について先生に尋ねたところ、スポーツフェスティバルで国歌を、ジブリパークへ行く時に「さんぽ」の英語バージョンを歌う予定だから、いまは練習しているということでした。

ソランの先生方の授業はいつも、子どもたちが楽しんで積極的に学べるように工夫されていて、本当に素敵だなと思います。

給食は黙食なので、お通夜みたいでちょっと寂しいなと感じましたが、3組では渡辺先生がちょっとした小話をしたりバイオリンを弾いたり、特別な空間をプロデュースされてましたね。

先生はいつランチを食べるのかなと思いつつ、私も演奏を楽しませていただきました。

ありがとうございました。

PN【AYA】さんより

AYAさん、授業へのご感想を寄せていただきありがとうございました。

ジブリパークへ行く時の「さんぽ」の話は、私も初めて知りました。

まさに、ぴったりの一曲ですね。

実は、入学式のパフォーマンスタイムの後に、私が自己紹介の中においてバイオリンで演奏しようと思っていた曲も、「さんぽ」でした。

あの時は、いろんなことを考慮して演奏は控えましたが、躍動感と高揚感に包まれたこの曲は1年生の学びにもぴったりだと思っています。

みんなと歌いながらジブリパークを目指す日がとても楽しみです。

さて、今回お便りの中で私が特に印象的だったのは、次の部分でした。

計算となると、早く解ける子とまだ時間のかかる子との差がありました。

計算が苦手な子にはカウント用のそろばんをかしたり、得意な子には追加でスペシャル問題を出したりと、それぞれに配慮があるのがいいなと思いました。

約30名もの子どもたちが集った教室で何らかの学習活動を行うと、毎回必ず「時間差」が生じます。

問題を解いても、絵を書いても、ノートに写しても、全員ぴったりと終了を迎えるわけではなく、バラバラにゴールを迎えます。

この「時間差を埋める技術」は、教職における一つの専門スキルだといえるでしょう。

一人にマンツーマンで教える時と違い、集団に授業をするときには、この技術は必須です。

この技を知らないと、途端に学級の雰囲気や崩れたり、緩んだりしていくからです。

反対に、上手に時間差を埋めてあげると、子どもたちの力は大きく解放され、伸びていきます。

参考例として、以前に同じく1年生を担当していた時に書いた通信から抜粋して紹介します。

(奈良県の私立小学校で勤めていた時の通信です。10年前のものです。)

=====抜粋ココから=====

朝、8時29分。

職員朝会を終えて、1年3組に行く。

教室に入ると、ほとんどの子はお知らせを書き終わって読書をしていた。

開口一番、

「今座っていた人？」

と聞く。

「はい！」と元気よく手が挙がった子たちを褒める。

さらに聞く。

「今読書をしていた人？」

これまた手が挙がった子を盛大に褒める。

現在は、提出物を出し、お知らせを書き終えてから、読書をして朝の時間を過ごすことにしている。

見ると、教卓にはいつものように集められた提出物があった。

立哨報告書や欠席届、ご家庭からの手紙などなど。

それらを確認した後、号令をかけた。

朝の挨拶、月目標の音読という順で朝の会が進む。

続いて、お知らせチェック。

字の大きさ・濃さを確認しながら、一声ずつかけてハンコを押していく。

「字が大きくて見やすいね。」

「昨日よりも濃くて良い字が書けているよ。」

といった具合である。

ハンコが押された子から、アサガオの水やりに行く。

お知らせチェックの列はみるみる減り、子どもたちはどんどんペットボトルを片手に運動場に出て行く。

しばらくすると、教室には私一人がぽつんと残された。

数秒経つと、先頭の子が帰ってくる。

その子から順に、今度は宿題のチェックである。

この日の宿題は、算数プリント、国語プリントの2枚。

それを持ってきた子から順に○付けをしていく。

間違いはその場で訂正し、正しい答えを教えて赤で書く。

終わった子から、次は百人一首である。

対戦相手を見つけ、思い思いの場所で札を広げ始めた。

この時、教室その他は次のような様子である。

百人一首の札を並べている子・・・3割

百人一首の対戦相手を探している子・・・1割

宿題のチェックを受けている子・・・3割

水やりから帰ってきて宿題のプリントを探している子・・・1割

アサガオの水やりをしている子・・・2割

一見雑然としているようにも見えるが、子どもたちの動きは素晴らしくスムーズである。

次に何をするか、はっきりしているからだ。

私は、このように活動を「かぶせる」概念は、子どもたちが伸び伸びと動く上で極めて大切だと思っている。

以前に書いたかもしれないが、教室では常に「時間差」が生まれる。

プリントを出す時然り、お知らせチェック然り、水やり然りである。

てきぱきする子がいれば、じっくり動く子もいる。

その時間差は、活動をかぶせることによってスムーズに解消する。

昨日も、百人一首の3試合目には全員が揃った。

もちろん、個人によって行う試合数は若干違う。

が、それでいいのだと思う。

水やりをじっくりしたい子もいるし、宿題のチェックに時間がかかる子もいる。

それぞれに、時間の配分は違っていても大丈夫なような仕組みを作ることができれば、子どもたちは実にのびのびと活動に取り組むようになる。

そして、この時間差の度に「待つ」ことはしないことにしている。

理由は3つ。

第一に、早い子がいつも待つことになるからだ。

毎回待つことで、次第に自分本来のスピードは出さなくなることだろう。

いつも力を出し切れずにいると、次第に意欲ややる気が落ちてくる。

第二に、ゆっくりな子がいつも急かされることになるからだ。

毎回急かされることで、常にその子は緊張状態になることだろう。

焦った状態が続くことは、活動そのものが嫌になる恐れもある。

第三に、知的でないからだ。

「待つ」ことは、非生産的な時間である。

「我慢する」ことへの耐性はやや身につくかもしれないが、それにしても毎回毎回「待つ」ことはさせたくない。

せっかくの貴重な時間なのだから、できる限りみんなの成長や喜びに役立てたいと思うのである。

このような理由から、1年3組では活動をかぶせることが多い。

クラスに話を戻す。

百人一首を5試合終えた後は、その日の連絡事項を伝え、配りものを配った。

配りながら、「論語」や「ことわざ」の全員で言う。

元気で、張りのある声が跳ね返ってくる。

「いい声だなあ」と褒めた。

そのまま暗唱の時間に移る。

これまで、クラス全体でもかなりの数の詩文を暗唱してきた。

中には、論語のように昔の仮名遣いで書かれたものもある。

「師曰く・・・」と朗々と読みあげる子どもたちの姿には、いつも驚かされる。

しかも、暗唱に至るまでのスピードがとても速い。

ゴールデンエイジとは凄いもので、本当にものの数回読んだだけで覚える子もいるから驚きだ。

いくつか詩文を読んだ後は、百玉そろばんをした。

パチパチと玉をはじく音と、みんなの声。

今でも大人気の教具である。

1年生にとって、特に「10の合成・分解」は大切な学習内容である。

毎日少しずつ扱う中で、最近はとてもスムーズに声が出るようになってきた。

そして、最後にドラえもんの話をした。

どんな内容かは、別の号に詳しく乗せようと思う。

実は、その1日前。

ある子から相談を受けていた。

どうも、仲良しの子とケンカしてしまったそうなのである。

「どうやって仲直りしたらいいかな」と、私に深刻な表情で聞いてきていた。

ところが昨日。

朝、玄関前でその子はとても晴れやかな顔をしていた。

そして私を見つけるなり、駆け寄ってきて言った。

「先生仲直りできました！」

その子はとても嬉しそうだった。

そして、ケンカをした友達とは前よりも仲が良くなったように見えたのである。

ちょうどいい機会かなと思って、みんなに伝えた話がドラえもんの話である。

こうして、朝の時間を終えた。

約20分間に、連絡、配りもの、水やり、宿題チェック、お知らせチェック、百玉そろばん、暗唱、百人一首5試合、ドラえもんの話が終わった。

朝の時間は、「ゴールデンタイム」と呼ばれるほど、一日の中でも大切な時間である。

とっても密度の濃い朝の時間を、さも普通に過ごしているみんなの姿にとっても感心している。

=====抜粋ココまで=====

この「活動をかぶせる」概念は、教室のいろいろなところで活用できます。時間差を吸収する技にも、いろんなタイプのものがあることをお伝えしようと思って、紹介させていただきました。

また、久しぶりに自分の書いた文章を読んで、この10年の間に学校教育において起きた目まぐるしい変化の数々を思わずにはいられませんでした。

自分が小学生の頃とは当然大きな違いがありますが、私が教職について教え始めた頃と比べても、壮絶な変化が起きています。

この変化の波はまだまだ続きそうですが、その中であっても変わらずに大切にしたいものは何かということも同時に考えました。

それこそ、私の小さい頃は早くできた時は「お利口さんの姿勢で待っておきなさい」と待たされ続けるのが主流でした。

そして、残念ながら、まだまだそういう対応が多くなされている学校も少なくありません。より良い方法や内容を学ぶのならば、変化し続けていくのが自然なのですが、不自然なことに変化を拒絶するような向きが教育現場に根強く残っているのもまた事実です。



AYA さんの投稿にあった「早い子への追加課題」や「ゆっくりな子へのフォロー」、つまり「常に生まれる時間差への配慮」は、教室で集って学ぶ限りこれからも大切なのだろうと改めて思うのでした。

ちなみに、その算数を担当されているのは中山先生ですが、追加課題を渡しつつ、ゆっくりな子へのフォローをスムーズに行うのが簡単なことでないことは、教職に就く者ならば誰もが分かるはずです。

そうした専門職にとって大切な技能の部分にスポットを当てて貰えたことも私としてはとても嬉しく感じました。

技術や技能は、単体として存在するのではなく、そこを磨き高めようとする使い手の「心」が現れます。

より良い学びの場が実現できるように、私もまた専門職にとって大切な技術を磨き、技能を高めていきたいと思います。（渡辺道治）

（ご意見ご感想などいつでも気軽にお寄せください。）

↓↓↓

[1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)